



関川村緑の少年団

教育長 津野庄一郎

宮沢賢治の作品に、「^{けんじゅう}度十公園林」という童話があります。村のみんなにからかわれながらも、笑顔を絶やさず木を植え続けた主人公の度十。度十が亡くなると、その家族は彼の植えた土地を大事に残しました。杉苗は杉林に成長し、やがて子どもたちの美しい公園になるというお話です。度十という人は、目先のことにとらわれず、100年先を見据え、環境をつくることの大切さを教えています。

いわふね新聞（令和7年4月30日）に、上関地内で小さな湿地を手入れする同地区出身の渡辺啓介さん（81歳）の記事がありました。10数年前に植えた水芭蕉が40株程に増えていることや、数年前からお野立公園隣にある荒川^{しやくやく}峡芍薬園の整備作業を続けていること等が紹介されていました。なかなか真似のできることはありませんが、こうした善意に共感し、感謝するのは私だけではないでしょう。

今年、関川村緑の少年団<設立：昭和57（1982）年>に入団したのは関川小学校の10名。先日の入団式では、新入団を代表して倉澤心那さん（4年）が、「自然に親しみ、緑に関心をもち、健康で心豊かな人になります」と誓いの言葉を述べました。村の森林組合や農林課・教育課のスタッフの指導のもと、仲間と育^{かつじゅ}樹や活樹の活動を通して、自然の大切さを学び、ふるさと関川を愛する心を育んでいきたいと思います。



<【写真】令和6年5月：緑化活動・グリーンパークあらかわ総合運動公園>